

Come と *Go* における基本用法と拡張用法に関する一考察

橋本 美喜男*

【要 旨】 この小論の目的は、認知言語学の枠組において *come* と *go* の基本用法とその拡張用法との間の関連性を捉えることである。第 1 章では、*come* と *go* の基本用法を客観的把握の図式で捉え直し、*come* と *go* の使い方の違いは、到達地が直接スコープにあるか、最大領域にあるかの違いに求めた。第 2 章では、*come* と *go* の拡張用法の違いもまた、到達地が直接スコープにあるか、最大領域にあるかによって説明できる可能性を示し、認知主体の捉え方は基本用法と拡張用法ともに基本的に同じであることを示した。

【キーワード】 基本用法、拡張用法、客観的把握、認知主体、最大領域、直接スコープ、トラジェクター、到達地、プロファイル

0 はじめに

この小論の目的は、例文(1)で示した *come* と *go* の文字通りの用法と例文(2)で示した拡張用法をそれぞれ認知言語学の枠組みで検討し、この二つの用法を統一的に捉える方法を探ることである。

- 1 a. We came to London from Rome.
- b. We went from Rome to London.

(Quirk (1985: 520))

- 2 a. Her hair has come untied.
- b. Her hair is going grey.

(Wordpower)

例文(1)では、代名詞 *we* が指している人間がローマからロンドンへの移動を表しているのに対し、例文(2)では、髪の毛の状態変化が表されている。本論では例文(1)のように物理的移動を表している場合を基本用法と呼び、例文(2)のように状態変化を表している場合を拡張用法と呼ぶことにする。

Come の基本用法と *go* の基本用法の間にはどのような違いがあるのか。そして、その基本用法の違いが状態変化を表す拡張用法にどのように反映されているのか。この二つの問題を中心

平成 21 年 11 月 2 日受理

*はしもと・みきお 大分大学教育福祉科学部社会福祉コース (英語学)

に考えたい。

第1章では、基本用法における **come** と **go** の使い方の違いを主に中澤 (2002) に基づいて検討した上で、深田・仲本 (2008) の枠組みで問題の2つの動詞を図式化し、各々の動詞の特性を考察する。第2章では、Clark (1974) と上野 (2007) に基づいて状態変化を表す拡張用法に触れ、第1章での **come** と **go** の図式化が拡張用法にも適用可能かどうかを検討する。第3章では、まとめと残された課題に触れる。

1 Come と Go の基本用法について

この章では、**come** の基本用法と **go** の基本用法を検討し、その違いを客観的把握を表す図式化を通して考察する。

上野 (2007) が指摘しているように、**come** と **go** は直示動詞に分類される。例文(3)においては、直示動詞 **come** と非直示動詞 **ride** を対比して示してある。

- 3 a. John rode the train from Boston to New York for three hours yesterday.
b. John came to me at noon today.

(上野 (2007: 349))

非直示動詞である **ride** の場合は、(3a)の文の話し手がどこにしようが成立する。他方、直示動詞である **come** の場合は、(3b)の文の話し手は今日の正午に **John** が到着したところに必ず存在しなければならず、話し手がどこにいるかが問題になる。さらに、次の例が示すように、話し手だけではなく聞き手もどこにいるかも関わっていることがわかる。

- 4 Bill came to the station at noon yesterday.
5 a. 話し手は発話時に駅にいる。
b. 話し手は昨日正午に駅にいた。
c. 聞き手は発話時に駅にいる。
d. 聞き手は昨日正午に駅にいた。

(上野 (2007: 350))

上野 (2007) によれば、(4)の文の解釈は(5)で示したように4通りもある。話し手または聞き手が発話時(coding time)に到達地である駅にいる場合か、もしくは話し手または聞き手が指示時(reference time)に、つまり昨日到達地である駅にいる場合である。ここで言及している発話時(coding time)とは、Fillmore (1977) に従って、話し手が発話を行った時を指し、指示時(reference time)とはその文中で表されている内容が実現する(した)時点のことを指す。

上の例からわかるように、英語の直示動詞である **come** と **go** の使用に関しては、発話時もしくは指示時における話し手もしくは聞き手の存在位置が問題になってくるのがわかる。この点を表としてまとめたのが、中澤 (2002) である。

中澤 (2002) において、**come** と **go** の使用条件が以下のように、発話時と指示時に誰が到達地にいるかという観点から9つのケースにまとめられている。

表 1

	発話時に到達地にいる人	指示時に到達地にいる人	移動動作動詞
ケース 1	話し手	話し手	*Go Come
ケース 2	(話し手)	聞き手	*Go Come
ケース 3	(話し手)	話し手聞き手以外	*Go Come
ケース 4	聞き手	話し手	Go Come
ケース 5	(聞き手)	聞き手	Go Come
ケース 6	(聞き手)	話し手聞き手以外	Go Come
ケース 7	話し手聞き手以外	話し手	Go Come
ケース 8	(話し手聞き手以外)	聞き手	Go Come
ケース 9	(話し手聞き手以外)	話し手聞き手以外	Go *Come

移動を表す場合における come と go の使用条件 中澤 (2002: 285)

表の中でカッコに囲まれている部分は、中澤 (2002) では空欄になっている。ここでは、わかりやすくするため、空欄になっていた部分も該当する語句を挿入した。

表 1 からわかるように、go が使用できないのは、ケース 1 からケース 3 であり、発話時に話し手が到達地に存在している場合である。一方 come の場合は発話時にも指示時にも話し手および聞き手が存在しないケース 9 の場合である。その他の場合では、相互に排除する関係ではなく、come と go の両方が使用できることが示されている。

具体例を見てみよう。

- 6 a. I won't be working here tomorrow, but Mr. Tanaka will come / *go for me.
 b. 私は明日ここで仕事をしませんが、田中さんが私の代わりに来ます/*行きます。
- 7 a. I'll be working at Hokkaido next month and Mr. Tanaka will come / go, too.
 b. 私は来月北海道で仕事ですが、田中さんも来る/行くことになっています。

(中澤 (2002: 283))

(6a) の例では、指示時(tomorrow)ではなく発話時に話し手が到達地(her)にいる。これはケース 3 に相当し、come は使用可能であるが、go は容認されない。同様に、この英文に対応する日本語の例である(6b)でも、「来ます」は可能であるが、「行きます」は使用できない。それに対して、(7a) の例においては、発話時ではなく指示時(next month)に話し手が到達地(Hokkaido)に存在し、これは、ケース 8 に相当すると思われる。表 1 が示しているように、例文(7a)は come と go の両方が使用可能である。また、例文(7b)から分かるように、日本語でも「来る」と「行く」の両方が選択可能である。

しかしながら、表 1 の条件には、少なくとも以下の 3 点の問題があると思われる。

- 8 a. 表 1 で come と go の両方が許される条件において、実際には come もしくは go の一方しか使用できない場合があること。
 b. come もしくは go の一方しか使用できない場合と come と go が両方使用可能な場合の間にはどのような違いがあるのか。

- c. Come と go の両方使用可能な(7a)の例のような場合, come を使った場合と go を使った場合ではどのような違いが存在するのであろうか。

まず, (8a)と(8b)の問題を中澤 (2002)に基づいて触れた後, (8c)の問題について考察する。

(9a)の例は, 英語と日本語の違いを表すためによく引用されるものであるが, 表 1 のケース 5 に相当し, 発話時と指示時に聞き手が到達地に存在する。表 1 では, come と go の両方が使えることになっているが, 実際は come だけが使用できる。

- 9 a. Yes, I'm coming / *going right away.
b. はい, 今 *来ます / 行きます。

(中澤 (2002: 287))

次の例は, 食堂で交わされる会話を想定している。

- 10 a. I'll come / *go to your office at three o'clock.
b. 3 時にあなたの研究室に *来ます / 行きます。

(中澤 (2002: 288))

発話時には話し手と聞き手ともに到達地にはおらず, 指示時には聞き手(と話し手)が到達地に存在する。表 1 のケース 8 に相当し, come と go の両方が可能と予測されているが, (10a)の例では go は選択されず, come が使用されている。

この問題に対して, Levinson (1983)は, 到達地である聞き手に対する敬語表現として come が許容されるとした。つまり, 到達地に聞き手がいれば, come が選択されることになる。しかし, 中澤 (2002)が述べているように, 聞き手が到達地にいても, go が使用できる例がある。

- 11 a. Are you on your way to the library? I'll come / go later. Which floor are you going to be on?
b. 図書館に行くんですか? 私も後で *来ます / 行きますが, どの階にいますか?

(中澤 (2002: 290))

例文(11a)において, come を使用した場合は Levinson (1983)が述べているように敬語表現として使用されているとしても, なぜ(10a)の例文において go は使われないのに対して, (11a)では go も使用可能であるのかについては何も述べていない。

この問題に対して中澤 (2002)は, go を排除し come が選択されるかどうかは, 聞き手の存在に加えて, 到達地が聞き手の位置としてより確立しているかどうかに関係していると考えている。つまり, (10a)の your office のように聞き手の恒常的な位置である場合の方が, (11a)の library のように聞き手と到達地の結びつきが希薄な場合よりも, come を選択しやすくすると主張している。

このように, 中澤 (2002)では, 聞き手と到達地の結びつきが come と go の選択に影響を与えると考えている。

もし聞き手が長い時間到達地にいることが聞き手と到達地の結びつきの強さを示すのであれば, 到達地に home を使用した例の場合は例文(11a)のパターンではなく, 例文(10a)と同じように go ではなく come が選択されるはずである。なぜなら home は聞き手との結びつきが(10a)

の **your office** よりもはるかに強いと考えられるからである。しかしながら、中澤 (2002) から予想されることとは反し、以下の例が示すように、到達地が **home** でも **come** と **go** の両方が使用できる。

- 12 a. **Come home before dark. This area is not very safe.**
 b. **My earnest advice to you is to go home and reconsider.**
 c. **Fortunately, the boss had compassion on me and allowed me to go home early.**

(英和活用)

(12a)の例文においては、指示時に聞き手が到達地に存在する場合で、**come home** が使用されている。他方、(12b)の例文においては、(12a)と同様に指示時に聞き手が到達地に存在するが、**go home** が使われている。(12c)の例文は、指示時に話し手が到達地にいる場合で **go** が使用されている。

上の例からわかるように、(10a)の例文と(11a)の例文における **come** と **go** の選択の違いは **your office** と聞き手の結びつきの強さまたは **library** と聞き手の結びつきの強さだけだとは考えにくいと思われる。この問題は、(8c)の問題を考察するときに再び触れたい。

最後に、(8c)の問題、つまり **come** と **go** の両方が選択可能な場合、**come** を選んだ場合と **go** を選んだ場合において、どのような違いがあるのかを考察したい。

以下の例を見てみたい。

- 13 a. **I'm going to your graduation.**
 b. **I'm coming to your graduation.**

(Radden et al (2007: 24))

(13a)と(13b)は動詞の部分のみが異なるミニマルペアである。指示時に聞き手(と話し手)が到達地に存在する場合で、表1のケース8に相当すると思われる。Radden et al (2007)によると、**go** が使用されている(13a)の例文には中立的な解釈(**neutral**)もしくは脅迫的な解釈(**threatening**)があり、(13b)では、**come** を使用することによって聞き手の立場に立っていることを表し、それによって好意的な(**sympathetic**)もしくは丁寧な(**polite**)感じを与えるとしている。

Radden et al (2007)は、発話をどのように聞き手が受け取るかによって **come** と **go** の違いを説明しようとしていることがわかる。これを話し手の立場から見ると、話し手はこれらの動詞の選択を通じて、上で述べたような効果を聞き手に与えようとしたと考えられる。

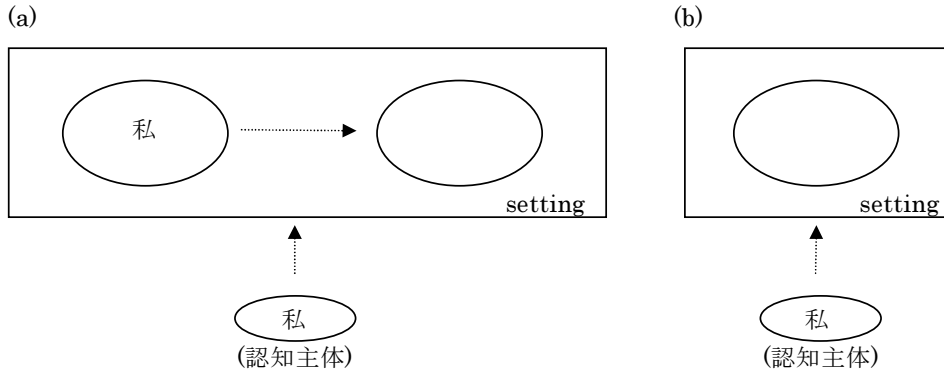
(13)の例から言えることの一つは、聞き手と到達地の属性の問題だけではなく、聞き手と到達地をどのように話し手が捉えているのかという話し手の認知の問題といえるかもしれない。本論では、紙幅の都合上(7a)や(13)の例のような主語が一人称の場合に限定する。

(8c)の問題を「客観的把握」と「主観的把握」の考え方をを用いて、話し手がどのように事態を捉えているのかという視点から考察したい。この考え方は図1のように図式化される。

図1は、認知主体と呼ばれる発話者が **setting** と呼ばれる背景において起こる状況をどのように認知しているかを表している。図1(a)は、客観的把握を図式化したもので、認知主体である話し手が **setting** の中にも現れている。その背景の中に現れた「私」を認知主体のもう一人の「私」が見ていることになり、話者の客体化(Langacker (1987))や自己の他者化(池上 (2003))

と呼ばれている。英語はこのように客観的に事態を把握していると考えられている。他方、日本語は図 1(b)で表されているように、背景の中に「私」は埋没して、認知主体からは見えない。このような捉え方は主観的把握と呼ばれている。

図 1: 客観的把握と主観的把握 (荒川・森山 (2009: 85))



例えば、「私には娘がいる」状況では、英語と日本語でそれぞれ以下のように表す。

- 14 a. I have a daughter.
b. 娘がいる。

(荒川・森山 (2009: 85))

英語では、認知主体が **setting** 中にある他者化された私(トラジェクター)と娘(ランドマーク)とも背景の中の図として位置づけられているので、両者とも言語化され、例文(14a)のように他動詞構文として表現される²⁾。日本語では、「私」は背景の中に埋もれてしまい、娘のみがトラジェクターとして位置づけられるので、(14b)のように自動詞構文として表現されると考えられている。

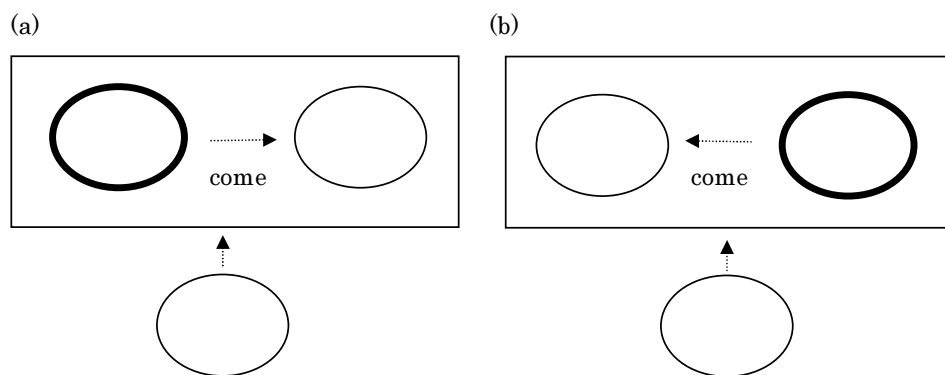
荒川・森山 (2009)は、この考えを英語の **come** に適用して、なぜ話し手が聞き手に移動する場合と聞き手が話し手に移動する場合の両方とも同じ動詞 **come** が使用できるのかを説明している。

次のページにある図 2(a)では、太線の円で表されているトラジェクター(話し手)が、細線の円で表されている聞き手への移動を表している。図 2(b)では、太線の円で表されているトラジェクター(聞き手)が、細線の円で表されている話し手への移動を表している。図 2 を見て分かるように、客観的把握をする英語では、認知主体にとってどちらの移動も同じように見えてしまう。したがって、英語では両方の場合において同じ動詞 **come** が使用できると考えている。

他方、日本語は主観的把握をする言語だと仮定されているので、図 1(b)から分かるように話し手から聞き手への移動と聞き手から話し手への移動は異なる見え方になる。よって、違う動詞を使っていると考えられている。

この説明は非常にわかりやすく説得力があると思われるが、残念なことに **go** の移動に関しての図式化が示されておらず、また **come** と **go** の両方が使用できる場合の認知主体の捉え方の差についての言及もない。

図 2: 英語の come (荒川・森山 (2009: 104))



この章の残りでは、**come** と **go** の両方が使用できる場合の認知主体の捉え方の差について考察したい。そのため、まず以下の例を考える。

- 15 a. I'm going to your graduation. (= 13)
 b. I'm coming to your graduation.

(Radden et al (2007: 24))

例文(15)を図式化するのに、図 2 では **come** も **go** も同じ図式にならざるを得ないため、本論では、深田・仲本 (2008) で紹介されている道具立てを使用する。そこでは、認知主体が把握する事態を少なくとも 4 つに分類している。そのうち、本論に関連するのは B パターンだと思われるので、それを以下紹介する³⁾。

B: 主体(C)は、事態の外から自らが参与者となっている事態(O)を把握する。

図 3: パースペクティブと主体の役割 (深田・仲本 (2008: 93-94))

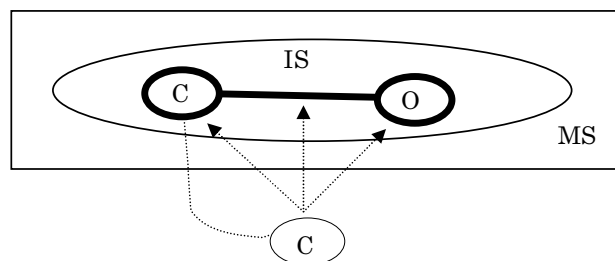


図 3 の長方形の領域は最大領域(Maximal Scope: MS)と呼ばれ、概念化の対象となっているすべての存在を含む領域である。長方形の中にある楕円形で表されている領域は直接スコープ(Immediate Scope: IS)と呼ばれ、MS の中でプロファイルされている存在を最も直接的に特徴づけている領域である。C は深田・仲本 (2008) において主体と呼ばれ、認知主体もしくは発話者と同じものだと考えられる。太線はプロファイルを表し、C から出ている矢印は、矢印に指

されている対象を C が把握していることを表し、二つの C を結んでいる点線は C 自らが参与者となっていることを表している。この例として、以下の文があげられている。

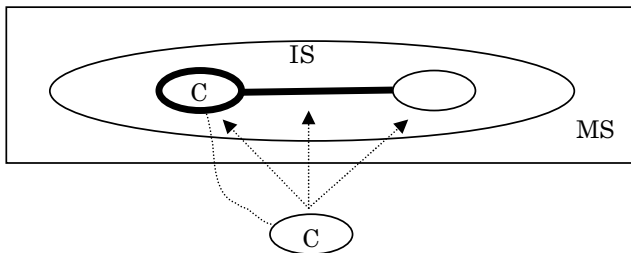
16 We are approaching Tokyo.

(深田・仲本 (2008: 94))

発話者である認知主体が **we** をトラジェクターとして、**Tokyo** をランドマークとして認知し、**we** が **Tokyo** に近づきつつある事態を把握していることを図 3 は表している。Primary figure である **we** が文の主語として表され、secondary figure である **Tokyo** が動詞の直接目的語として表されている。

例文(15b)を図 3 に基づいて図式化すると、図 4 になると思われる。

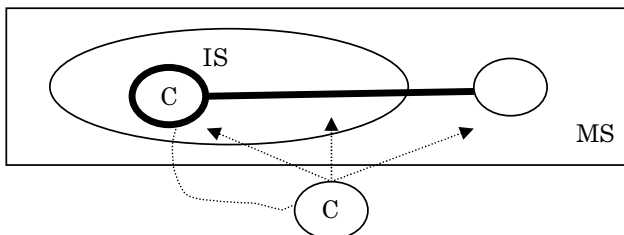
図 4: come の図式化



認知主体 C が話し手である私(I)をトラジェクターとして把握し、トラジェクターが到達地(your graduation)へ向かっている事態を C が把握していることを図 4 は表している。到達地が太線の円ではないのは、直接目的語ではなく、前置詞句で表されているためである。この図は、話し手が聞き手のいる場所へ移動する場合を表しているが、聞き手が話し手のいる場所へ移動する場合も基本的に図 4 で表示できる。到達地である C を囲んである太線を細線にし、細線の円を太線にすればすむと思われる。この場合も、認知主体からの見えは、話し手から聞き手への移動と同じであり、どちらの移動にしても、come が使われることを説明可能にする。

次に例文(15a)は以下のように図式化することが出来ると思われる。

図 5: go の図式化



認知主体 C が話し手である私(I)をトラジェクターとして把握し、トラジェクターが到達地(your graduation)へ向かっている事態を把握していることと到達地が細線の円で表されている点は、

図4と同じである。異なる点は、到達地がISの外のMS領域にある点である。到達地をこのようにISの外に置く利点の一つは、goでは話し手への移動ができないことを説明可能にすると思われることである。つまり、聞き手が話し手に移動する事態をgoでは図式化できないことである。この場合、図5でトラジェクターであったCがMSで地として埋没してしまうことになり、ISにCが存在せず、基盤とした図4の客観的把握を維持できないためである。

この捉え方が正しいとすると、表1のケース1から3でなぜgoが使用できないかがこの図式化から説明できるとと思われる。

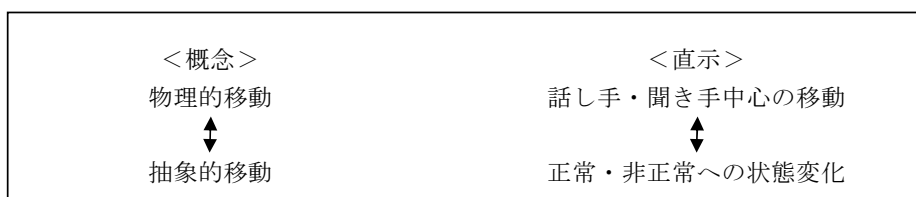
最後に(15a)と(15b)の捉え方の違いについて、この図式化から何が言えるのかを考察する。上の図式化で述べているのは、到達地への移動に対し、comeの場合はIS内に存在し、goの場合はIS外にあると述べているだけである。IS内にあると言うことは、図3を説明したときに述べたように、認知主体にとって特徴的な存在に見えていると考えられる。Radden et al (2007)が指摘した例文(15a)と(15b)の意味の違いについては、語用論的な要因(話し手と聞き手の関係、背景知識、話者の意図など)とIS内に到達地への移動が位置づけられているどうかとの相互作用から意味が立ち上がってくるものだと考えられる。Comeの場合は、IS内にあるので、他の語用論的要素との相互作用から「好意的」で「丁寧」な解釈が生まれ、goの場合はISの外にあるので、認知主体にとって特徴的な存在として見えておらず、語用論的な要因の影響を受けながら、中立的または脅迫的な読みが生まれると思われる。

2 Come と go の拡張用法について

この章では、1章で概観したcomeとgoの基本用法が拡張用法にどのように反映しているのかを考察する。最初に、Clark (1974)の仮説と上野 (2007)の考えを簡潔に紹介したうえで、基本用法と拡張用法の関係を考察したい。

上野 (2007)によると、Clark (1974)の仮説は以下のようにまとめられている。

図6： Clark (1974)の仮説 (上野 (2007: 354))



物理的移動を表す動詞が抽象的移動すなわち状態変化を表すことはよく知られている言語現象である。Clark (1974)の仮説では、話し手・聞き手の領域に移動することを表すcomeは、抽象的移動を表す場合において「正常な状態変化」を表し、話し手・聞き手以外の領域に移動するgoは、抽象的移動を表す場合において「異常な状態変化」を表すとされている。つまり、話し手・聞き手への移動が正常な状態変化（つまりポジティブな価値付け）に、そして話し手・聞き手以外への移動が異常な状態変化（つまりネガティブな価値付け）に関連づけられているのである。

この仮説は例(17)のような多くの例を説明できる。

- 17 a. Her father's going senile/blind/deaf.
 b. The idea of going grey doesn't bother me, but I'd hate to go bald.

(CALD)

(17a)の例は、認知症になったり、目が見えなくなったり、耳が聞こえなくなったりと異常な状態変化を表しているため、go が使用されていると考えられる。(17b)で言及されている状態変化(白髪が増えたり、頭がはげること)は、(17a)で言及されている状態変化に比べたら、異常な状態変化とは言えないかもしれないが、この場合も go が使用されている⁴⁾。

次の例においては、どちらともいい方向に変化したと考えられるため、come が使用されると思われる。

- 18 a. Her dream came true.
 b. The motor came alive again.

(安藤 (2005: 51))

Clark (1974)の仮説は、なぜ come は「いい状態変化」を表し、go は「悪い状態変化」を表すのかを、物理的な移動と関連づけてうまく説明しているが、それでもまだうまく説明できない例が存在する。

上野 (2007)では、「悪い状態変化」を表している場合でも、come が使用されている例を以下のように挙げている。

- 19 a. The knot [came / *went] untied.
 b. The door [came / *went] unhinged.
 c. The shoelace [came / *went] undone.

(上野 (2007: 365))

(19a)と(19c)の例では紐の結び目が解けた状態を指し、(19b)ではドアの蝶番が外れたことを表している。状態が悪い方に変化しているのにもかかわらず、come は使えて、go は使えない。他方、状態がいい方向に変化しているのにもかかわらず、以下の例では come は使えず、go を使わなければならない。

- 20 a. Take two tablets of this medicine after each meal until the pain [goes / *comes] away.
 b. My fatigue was [gone / *come] after lying down to rest for some time.

(上野 (2007: 370-371))

例文(20a)の例は、痛みがあった状態から痛みがなくなった状態を表し、例文(20b)も同様に疲れがあった状態からなくなった状態を表している。

この問題を解決するために、上野 (2007)は「現実世界での常識」と「言語世界の事実」を分けなければ解決できないと述べている。つまり、現実世界における良い状態変化と悪い状態変化と言語世界における良い状態変化と悪い状態変化では指しているものが異なると考えられている。言い換えると、言語の世界では「存在するようになる」ことが「好ましい状態になる」ことであり、「消失してしまう」ことが「好ましくない状態」と捉えられているので、「存在」を表す場合は come が、「消失」を表す場合は go が使用されると主張している。

例文(21a)においては国が存在するようになり、また(21b)では船が視界に入ってくるようになるので、go ではなく come が選択されることになる。

- 21 a. The country [came / * went] into existence a long time ago.
 b. An island [came / * went] into sight.

(上野 (2007: 371))

Come ではなく go が選択される例文(20)の例では、痛みや疲れが「消失」しているので、go が選択される。

「存在」と「消失」が確かに一つの重要な要因であると思わせる例が次の例である(strain は stain の誤植だと思われる)。

- 22 a. The strain (*sic*) in my shirt came out easily.
 b. The strain (*sic*) went out like a magic, owing to the newly invented bleach.

(上野 (2007: 373-374))

例文(22a)においては、服に付いたシミは汚れを拭きとるための布に移動しただけであり、消失したわけではない。よって、go ではなく come が選択されている。(22b)においては、シミが魔法のように消え去ったことになるので、come ではなく go が選ばれている。同じ説明は例文(17)の例にも当てはまる。結び目が解けたり、ドアが外れたりしても、存在そのものが消え去っているわけではないので come が使用されると考えられる。

例文(17)の例のように、「存在」と「消失」の違いからは説明しづらい例もあるが、ここからは、言語の世界における「存在」と「消失」の違いを認知主体の捉え方の違いに還元させ、物理的移動を表す用法と統一的な説明を試みたい。

第1章における come の図式化から分かるように、トラジェクターと到達地への移動は IS 内にある。第1章で述べたように、IS 内にあるものは MS でプロファイルされているものを直接的に特徴づけているものである。言い換えると、認知主体によって直接見えているものと捉え直すことができるかもしれない。他方、go の図式化においては、到達地への移動は IS の外にあるものとして、聞き手が話し手への移動を go で表せないことを第1章で述べた。この考えが誤りでなければ、go における到達地への移動は認知主体からは見えないことになると思われる。

上のように考えるならば、なぜ come は「存在」を示す場合に用いられ、go は「消失」を用いられるのかを、物理的移動の用法と関連づけて説明可能になるとと思われる。要するに、基本用法と拡張用法における come と go の違いを、到達地への移動が IS の内にあるか IS の外にあるかに還元できることになる。

3 まとめと残された課題

認知言語学の枠組みを用いて come と go の基本用法とその拡張用法を統一的に捉えるため、第1章では、主に中澤 (2002)に従って come と go の基本用法を押さえた上で、深田・仲本 (2008)の枠組みで come と go を図式化し、おのおのの動詞の特性を捉える試みをした。第2章では、Clark (1974)と上野 (2007)を主に参考にして come と go の拡張用法を記述した上で、第1章

での **come** と **go** の図式化が拡張用法でも適用可能かどうか考察し、ある一定の一貫性を捉えることができたと考えられる。

しかしながら、本論では表 1 の 9 つのケースすべてについて議論しているわけではないこと、第 2 に、**come** と **go** の図式化は認知主体が同時にトラジェクターになっている場合しか考察していないこと、第 3 に、**go** の図式化において到達地が IS の外にあることを示す独立した根拠を示していないなどまだ多くの課題が残っているが、今後の研究に待ちたい。

註

1) 主語が 3 人称の場合、以下の例が示しているように、話し手もしくは聞き手が指示時に到達地にいるかどうかで、**come** と **go** の選択の違いが現れてくるようである。

- i
 - a. John came to my room when I was there.
 - b. John came to your room when you were there.
 - c. John went to my room when I was not there.
 - d. John went to your room when you were not there.

(池上 (1981: 102-103))

例文(ia)と(ib)が示しているように、到達地に話し手もしくは聞き手が指示時に存在する場合は、**come** が選択される。他方、例文(ic)と(id)が示しているように、到達地に話し手もしくは聞き手が指示時に存在しない場合は、**go** が選択されている。しかし、教授が秘書に電話で伝えている場面での発話である次の例が示しているように、必ずしも話し手が指示時に存在しない場合でも、**come** が使用されている。

- ii When John comes to my office, tell him ...

(池上 (1981: 102-103))

さらに、話し手が指示時に存在しても、**go** が使用されている例がある。次の 2 例は google 検索によって見つけたものである (google 検索においては、英語のページを指定し、地域をアメリカ合衆国に限定した)。

- iii
 - a. He goes to my office after his work and fetches me...we go home together.
 - b. On Thursdays she goes to my office and works for about two hours. After that we normally go to have supper.

この 2 例とも、文脈から office に話し手が指示時に存在していると推測できる。このことから、話し手や聞き手が指示時に存在することも重要な要因であるが、トラジェクターが 3 人称の場合も認知主体が事態をどのように把握しているかを考慮しないと上記の例はうまく説明できないと思われる。

2) 深田・仲本 (2008)によれば、トラジェクターとランドマークは、二つの存在の関係を表す用語である。際立ちの高いもの(primary figure)がトラジェクターで、これを位置づける参照点として機能しているもの(secondary figure)がランドマークである。

3) 残りの A, C, D のパターンは以下の通りである(図は省略する)。

A: 主体(C)は、事態の外から自らが参与者とはなっていない事態(O)を把握する。

C: 主体(C)は、事態が起こる場を形成し、その上で事態(O)を把握する。

D: 主体(C)は、事態の中に入ってその事態(O)を把握する。

4) 以下の例が示すように、補語が bald や grey の場合、come を使用している例がある。

- ix a. I recently bought some dummy heads, but they came bald. So I went to go get hair for my mannequin heads.
 b. (略) the new hair came grey or white, while the hair on their head was black, (略)

上記 2 例も google 検索で見つけたものであり、検索条件は註 1 で述べたものと同じである。例文(ixa)では、かつらの髪の毛が抜け落ちている状況を述べるのに come を使っている。他方, (ixb)では、髪の毛が白くなりつつある状況を述べていると思われる。

参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社, 東京.
 荒川洋平・森山新 (2009) 『日本語教師のためのわかる応用認知言語学』 凡人社, 東京.
 Clark, E. V. (1974) “Normal States and Evaluative Viewpoints”, *Language* 50, 316-332.
 Fillmore, C. J. (1997) *Lectures on Deixis*, CSLI Publications, Stanford.
 深田智・仲本康一郎 (2008) 『概念化と意味の世界』 認知言語学のフロンティア 3, 研究社, 東京.
 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店, 東京.
 池上嘉彦 (2003) 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標 (1) 『認知言語学論考』 3号, 1-49.
 池上嘉彦 (2004) 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標 (2) 『認知言語学論考』 4号, 1-60.
 小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』 研究社, 東京.
 Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1, Stanford University Press, Stanford.
 Langacker, R. W. (1990) “Subjectification.” *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.
 Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge.
 中澤恒子 (2002) 「来る」と「行く」の到着するところ」 生越直樹 (編) 『対照言語学』 東京大学出版会, 東京.
 Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
 Radden, G. and R. Dirven (2007) *Cognitive English Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.
 上野義和 (2007) 『英語教師のための効果的語彙指導法—認知言語学的アプローチ—』 英宝社, 東京.
 Wierzbicka, A. (1988) *The Semantics of Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.

引用した辞書とその略号

- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, (2003) Cambridge University Press. (CALD)
Wordpower Dictionary for Learners of English, (2000) Oxford University Press.
 (Wordpower)
 市川繁治郎 (編) (1995) 『新編 英和活用大辞典』 研究社, 東京. (英和活用)

A Study of the Semantic Differences between *Come* and *Go*

HASHIMOTO, Mikio

Abstract

In this paper, I deal with verbal polysemy (*come* and *go*) within the framework of Cognitive Linguistics. To account for the semantic differences between *come* and *go*, I propose a schema model in which a conceptualizer recognizes an event and a trajector that refers to the conceptualizer. I indicate that the differences between the two verbs reflect the position of a goal in the event: the position is inside Immediate Scope (IS) in the schema model (*come*) while it is outside IS in the model (*go*).

【Key words】 Objective Perspective, Conceptualizer, Maximal Scope, Immediate Scope, Trajector, Profile